

麻布と落語(井戸の茶碗)



平成 23年(2011年)

泉ガーデン上層階から、くず屋の清兵衛が住んでいたとされる旧麻布谷町の方を望む。住居表示はなくなったが、首都高速3号渋谷線と都心環状線の合流地点、「谷町ジャンクション」(写真中央)の名に残されている。



昭和 52年(1977年)

旧麻布谷町の商店街。道路の左側が六本木1丁目1番、右が1丁目3番、上方の建物はスペイン大使館と思われる。



昭和 48年(1973年)

旧麻布筆筈町北寄りの高台から旧麻布谷町を望む。上方に当時の霊南坂教会が見える。

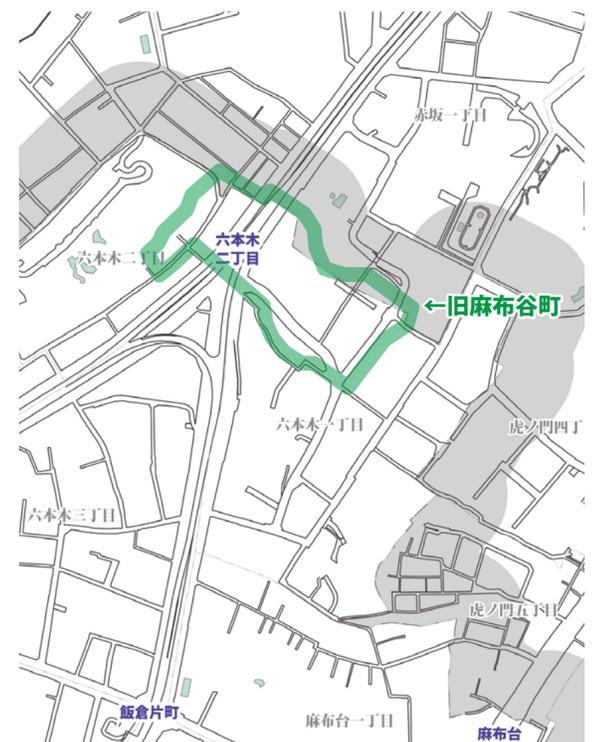
井戸の茶碗(あらすじ)

麻布谷町に住む正直者のくず屋の清兵衛が白金の清正公(覚林寺)の前を歩いていると、身形は粗末だが、どこか品のある若い娘に呼び止められた。娘について裏長屋に入ると、父親の浪人・千代田ト斎から仏像を二百文で買ってくれないかと頼まれる。もし売れたら儲けは折半ということで仏像を引き取った清兵衛。仏像を籠に入れ、三田の細川侯のお屋敷の窓下を通ると、窓から若い武士に呼び止められ、武士は仏像を三百文で買った。

煤けた仏像を武士がぬるま湯に漬けて磨いていると、台座の下に貼られた紙がはがれて小判五十両が出てきた。驚いた武士は売り主に返そうと思ひ、仏像を買ったくず屋探しを始める。清兵衛を見つけた武士は、「細川家の高木佐久左衛門」と名乗り、「仏像は買ったが小判を買ったおぼえはない」と、清兵衛に五十両を託しト斎のもとに届けさせた。

ところが、「売った仏像から何が出ようと、それはもう自分のものではない」とト斎も譲らない。見かねた長屋の大家が、高木とト斎とで二十両、残りの十両を清兵衛にとの妙案を示すが、ト斎は納得しない。「お金を受け取るかわり、先方になにか品物を差し上げてはどうか」との大家のすすめに、ト斎はいつも使っている父の形見の茶碗を高木に渡し、ようやく二十両を受け取った。

この美談が家中で評判になり、細川家の殿様が茶碗を見たいという。目利きの鑑定で「井戸の茶碗」という名器であることがわかり、殿様が三百両で買い上げた。おかげで清兵衛はまたもやト斎と高木の間を行ったり来たり。「娘を嫁に差し上げ、結納がわりなら金を受け取る」という条件でようやくト斎は折り合う。清兵衛がその条件を伝えると、高木も娘との結婚を承諾。「よい娘です。磨けば美人になりますよ」「もう磨くのはよそう。また小判が出てくるといけない」。



旧麻布谷町は、現在の六本木1・2丁目と赤坂2丁目の一部にあたる。町名が廃止されたのは昭和42年(1967年)。昔ながらの家屋が建ち並ぶ町は首都高速で分断され、大型複合施設や高層ビルの建設が相次ぐなどして、様相は一変した。